企 画 展　ー民俗芸能のデザインー

芸能の道具立て

Ⅰ　里神楽　ー下日出谷和久津家の神楽ー
Ⅱ　ささらの造形　ーささら獅子舞ー
Ⅲ　喜びの芸能　ー万作と接待餅ー

〔展示期間〕
平成29年12月2日（土）～平成30年2月18日（日）

桶川市には、祖先から受け継いだ「ささら獅子舞」「万作」「接待餅」などの民俗芸能が伝えられています。

これらの芸能に用いられる道具や衣装には、晴れの日に舞い踊る人々の心意気や時の流れの中で育まれてきた創意を見ることができます。

Ⅰ　里神楽　ー下日出谷和久津家の神楽ー

かつては、祭礼の折、村の神社では、神楽師を招いて神楽が奉納されていました。

下日出谷の和久津家は、昭和初期から40年代まで、里神楽の太夫元をつとめていました。和久津家の神楽は、明治27年生まれの和久津伊作氏によって昭和初期に始まり、昭和32年に伊作氏が亡くなった後も昭和40年代まで活動していました。伊作氏は、製茶業を営む傍ら、神楽を習い覚え、地元下日出谷の仲間とともに一代で太夫となりました。

和久津家に伝えられている神楽の衣装や面などの道具は300点を超え、現在、桶川市指定有形民俗文化財となり、当館に収蔵されています。

これらの道具は、神楽師の交流の中で譲り受けた面や、家族で手作りした衣装が含まれ、当時の神楽太夫の暮らしや演目の姿を今に伝えています。

神楽衣装　三番叟

住吉神（黒尉）

住吉の舞

Ⅱ ささらの造形 ―ささら獅子舞―

ささら獅子舞（前領家）

ささら獅子舞とは、東日本の村むらに多く伝えられている獅子舞で、腰に太鼓をつけ、獅子頭をいただいた３人の舞い手によって演じられます。桶川市内では、小針領家と、川田谷の前領家、松原、三田原の各地区に伝えられています。

ささら獅子舞は、舞手のほかに、宰領とも呼ばれる先導役と「ささら」を手にする花笠によって演じられ、さらに、笛方をはじめ高張提灯、法螺貝、錫杖などの道具を手にする人びとに支えられています。

現在も、コミュニティにとって欠くことのできない大切なものとして、まさに地区を挙げての行事として秋の祭礼を彩っています。

桶川のささら獅子舞の起源については詳らかではありませんが、長い伝統の中で各地区ごとに個性的な姿を今に伝えています。

今回の展示では、獅子頭をはじめとする用具の姿をとおして、ささら獅子舞の歴史と先人の創意をお伝えします。

篠（ささら）

松原の宰領の扮装（頭巾、陣笠、面、瓢箪、バチ）

宰領の羽織に描かれた龍（前領家）

Ⅲ 喜びの芸能 ―万作と接待餅―

万作踊り（三田原）

桶川地方の民俗芸能で、もっとも多くの人たちに親しまれているのが、「万作」です。

万作は、村の若者の付き合いの中で伝承され、昭和20年代までは手踊りに加えて段物と呼ばれた万作芝居も演じられていたそうです。

戦後は、女性たちが伝承に参加するようになり、桶川を代表する芸能となりました。

銭輪（三田原）

万作衣装（薬師堂）

鉦と四つ竹のリズムにのせて歌が始まると、だれもが踊り始め、どんな場所でも喜びにみたされていく。万作は、そんな力のある芸能です。

今回の展示では、伝統を伝える衣装をもとに、各地区の万作の姿を紹介します。

接待餅は、祝いの場の餅の振る舞いが、若者たちの工夫によって芸能となったものです。市内では、下日出谷と加納、川田谷の狐塚と薬師堂に伝えられています。

今回の展示では、たすきに鈴のついた華やかな衣装とともに、各地区の芸の姿をパネルによって紹介します。

餅搗き用の杵と曲搗き用の杵（狐塚）

接待餅（加納）